

専門科目でのレポート課題の実態とレポート作成上の問題点

ー専門教員及び留学生へのインタビューから

北海学園大学経済学部 二通信子

1. はじめに

本稿では、学部段階の留学生が大学での共通教育科目及び専門科目（以下、本稿ではこれらを総称して専門科目と呼ぶ）で課されるレポート課題の実情と、彼らがレポート作成にあたって直面する問題点を、発表者の所属する大学での教員及び留学生へのインタビュー調査の結果をもとに検討する。

筆者は学部留学生への文章表現のクラスを担当しているが、留学生の専門科目でのレポート課題の実情や、専門科目でのレポート作成で実際にどのような困難に直面しているのか、またどのような能力やスキルを必要としているかについては、これまで断片的な情報しか得ていなかった。先行研究に関しては、専門分野でのレポート・論文作成につなげる指導として、深澤（1994）の科学技術論文の指導、池田・影山（2000）の文系の研究留学生を対象とする作文指導をはじめとして様々な実践・研究が行われている。また、小宮（1995）小宮・横田（2002）などの専門分野で使われる語彙についての研究も進められている。しかし、それらは主に大学院レベルの研究留学生を対象としたもので、学部段階の1、2年生を対象として専門科目でのレポートの実情や留学生が抱えている問題について調べたものはほとんどない。一方、英語教育においては、Horowitz(1986)、Leki & Carson(1994)、Leki (1995)をはじめ、大学で学ぶ非英語話者の専門科目でのレポート作成上の問題について様々な調査・研究が行われている。北米では大学での学習におけるライティング能力が日本より重視されているという事情の違いがあり一概に比較はできないが、日本でも学部留学生の受入れが増えていることから、現状を把握し日本語クラスでの指導内容に反映させる必要があると考え、今回の調査を行った。

インタビュー調査の結果、専門科目のレポート課題については、ある事柄について自分の学習の結果を盛り込みながら説明するというタイプのレポートが多いこと、また、クラス規模の関係からレポート課題を課す科目は全体の3割前後とそれほど多くなく、担当教員からのレポート作成に関する指導や提出後のフィードバックもあまりなされていないことが明らかになった。また、学生へのインタビューにおいては、専門科目でのレポート作成上の問題点として、入学前のレポート作成の経験がほとんどないためにレポート課題にどう取り組んでよいかわからないこと、専門文献の読み取りや自分で論理を組み立てることが難しいこと、専門語彙や専門の内容に関する背景知識が不十分なこと、教員からのフィードバックが得られないことなどが挙げられた。本稿では、そうした結果を踏まえて、最後に今後の指導上の課題についても言及する。

2. 調査の方法

まず、学部の講義概要によって、成績評価の方法としてレポートを課している科目を調べ、レポート課題の頻度を明らかにした。次に学部の講義やゼミでレポート課題を課している6名の専任教員にインタビューを行った。また、経済学部及び人文学部の留学生合計10名に専門科目でのレポート作成についてインタビューを行った。インタビューの時期は2002年9月～10月で、教員には1人

30分～1時間、学生には1人30分程度の時間で話を聞いた。インタビューの対象者の内訳及び主な質問内容は以下の通りである。

<対象者>

教員：北海学園大学経済学部の共通科目及び専門科目担当の教員 6名

学生：同大学の留学生で経済学部1年4名、2年4名、人文学部3年2名、計10名。留学生の日本語能力は日本語能力試験1級レベルが約6割で残りは2級後半レベル。なお、人文学部の留学生については、1、2年の経済学部の留学生に比べ、日本語能力及びレポート作成経験も上回っていることから、前者との比較のために対象者に入れた。

<教員に対する質問>

- 1) 1、2年を対象とした専門科目において、どのような内容のレポートを課しているか。
- 2) 講義の中でレポート作成に関してどのような指導を行っているか。
- 3) 学生のレポートをどのような基準で評価しているのか。

<留学生に対する質問>

- 1) これまで日本語以外の科目でどのようなレポート課題が出されたか。
- 2) レポート課題について担当の教師から事前、事後にどのような指導がされたか。
- 3) レポートを書く前や書いているときに、どんなことが難しかったか。
- 4) 日本語クラスでのレポートを書くときと日本語以外のクラスでレポートを書くときとは、どういう違いがあると思うか。
- 5) よりよいレポートを書くために、今後さらにどのような日本語の能力が必要だと思うか。

上記の留学生への質問のうち、本稿では特に1)～3)の質問に関して報告する。

3. 調査の結果

3-1 レポート課題の頻度

ここでは、ゼミ、外国語、体育実技などを除く専門科目で、レポートを課している科目の比率を見る。北海学園大学の経済学部の場合、科目の種類として、専門科目、基礎専門科目、法律科目、共通基礎科目がある。法律科目とは法律に関連した科目で経済学部の学生に開講されているものを指す。なお、以下の表1の数字は経済学部の経済及び経営の2学科の科目を合計したものである。

表1 成績評価にレポートを採用する科目の数

a…レポートと試験の両方で成績を評価をする b…レポートまたは試験のどちらかで成績を評価をする。 c…試験のみで成績を評価する。

評価方法	専門科目	基礎専門科目	法律科目	共通基礎科目	総数 [%]
a	23	2	1	9	35 [27.6 %]
b	2	3	1	2	8 [6.3 %]
c	42	3	7	32	84 [66.1 %]
科目総数	67	8	9	43	127 [100.0 %]

表1によると、レポートを課す科目は科目全体の3割弱である。aの科目のほとんどは、レポートを学期の途中で課すが、試験の方に重点を置いて成績評価を行うとしている。また、bの場合は、

レポートを課すかどうかは学生数によって判断するとしている。留学生によると、一つの学期で平均2科目程度ということで、レポート課題の比率はそれほど大きくない。

下の表2は科目のタイプ別のクラス規模を示している。講義科目では数百人というクラスも少なくない。クラスの学生数が多いことが、教員がレポート課題を避ける原因の一つとなっている。

表2 科目のタイプ別にみたクラスの規模

科目のタイプ	クラスの学生数
一般の講義	500人を限度とする。平均200人程度。
経済学・経営学概論	60人を限度とする。
ゼミ（3年生以上）	30人を限度とする。平均15人程度。

3-2 レポート課題のタイプとレポート課題の実例

今回の調査では、主に1、2年生を対象とする講義、概論、ゼミにおけるレポート課題について調べた。教員及び留学生の両方のインタビューで挙げられた課題は14例で、ここではそれらをレポートのタイプ別に以下のように分類した。右側の数字は該当する課題の数である。

- a. ある事柄についての説明 …………… 8
- b. フィールド・リサーチ …………… 2
- c. 参考文献の要約 …………… 1
- d. ケーススタディについての考察……… 1
- e. その他 …………… 2

上のaの「説明」の場合はある事柄について具体例をつけて説明するというように、その内容を正確に理解し自分の言葉で説明することが求められる。意見も含む場合もあるが、それに主眼を置いてはいない。dの「考察」の場合は、事柄の正確な理解のうえに自分の独自の考察や意見が重視される。今回収集したレポート例では、aのタイプが最も多かった。これは今回の調査が1、2年生を対象とする科目について調べたということも関係していると考えられる。以下、教員へのインタビューで収集したレポートの具体例を上タイプ順に挙げる。

a. ある事柄についての説明

課題：企業の社会的責任について、具体的な事例を挙げて説明する。

長さ：A4 1枚程度

評価ポイント：以下の点をそれぞれA, B, C, D, で判定。総合評価はAA, A, B, C, Dの4段階

- ①論点は整理されているか ②論旨の内容の独創性 ③論旨の内容の妥当性
- ④引用の適切性 ⑤文章・文字表現

留意点：教員宛てにEメールで提出させる。

指導：各評価ポイント、総合評価の評定とともに1、2行程度のコメントを返信する。

b. フィールド・リサーチ

課題：各自のNPOでの実習体験をもとにした発表（レジュメ及び読み上げ原稿の作成）

長さ：レジュメーB4で1～2枚程度に要旨。別紙でB4で1枚程度のデータを添える。

読み上げ原稿ー 400字詰め原稿用紙10枚程度

- 留意点 : ①組織・団体名、役職、時、場所は正確に記述する。
②内容を最もよく表現する用語を選び、一度使用した言葉は、理由がない限り変更しない。(例えば「老人」と「高齢者」など)
③全体が一つのストーリーになっているかどうか注意到する。

- 指導 : ①発表の前の段階としてグループ内での中間報告の機会を作る。
②「プレゼンテーションの方法」のプリントを配布し、レジュメに入れる内容、レジュメの作成、読み上げ原稿の作成などについて説明する。

*上の例は上級学年でのゼミ論文作成に至る過程での総合的な活動として行われた。

c. 参考文献の要約

課題 : 参考書(新書判 1冊)の全15章の各章の要点を箇条書きにまとめる。

長さ : 一つの章につきB5 1~2枚程度、合計15~30枚

評価ポイント : 参考書の内容を正しく把握しているか。

指導 : 事前に箇条書きの書き方や課題の目的について説明する。

*上の例は前期の夏休みに出されたもので、後期にはこの文献がゼミで輪読される。

d. ある事柄についての考察

課題 : 参考文献のケーススタディの1つ(5~6頁)を取り上げ、それに関する考察を書く。

長さ : レポート用紙 1~2枚程度

評価ポイント : レポートの構成と内容の両方を見る

構成は「意見-根拠-結論」の順で、それぞれが明確に示されていること

留意点 : 文献を参考にして書くこと

指導 : 事前に口頭で説明する(レポートの構成、文献の引用のしかたなど)

e. その他

課題 : 先住民、少数民族などの珍しい生活上の風習や習慣などを文献資料から引用し、それについて「なぜ自分は奇妙だと思ったのか」を説明する。

長さ : B5のレポート用紙1枚

狙い : ①自分が常識としていることを問い直し、「異なるもの」を排斥したり侮蔑したりするのではなく、その背景も含めて正しく理解する態度をつける。

②引用文の書き方を身につける

引用文を正確に転記する。引用の場合、筆者について最低限の情報を書く。

引用文献名、注を適切に書く、など。

指導 : ①事前に「引用文転記の書き方」を配布し、書き方を説明する。

②各自が提出したものについて小グループでお互いに発表し話し合う。自分が感覚的に感じていることを第三者に分かるように説明することを学ぶ。

3-3 専門科目におけるレポート課題についてのまとめ

今回調査した1、2年生を主な対象とするレポート課題では、ある事柄について説明するという

タイプのレポートが多かった。講義で扱われた事柄について、具体的な事例や文献等による資料を示しながら自分の言葉で説明することが求められる。しかし、レポート課題を出す科目はそれほど多くない。試験のみで成績を評価とする科目は7割近くに及び、レポート課題を出す比率は全科目の3割弱だった。前節の表2で示したように本学では講義科目のクラス規模が大きく、そのためゼミ以外の科目でレポート課題を出すのが難しい状況にある。

レポートの評価の観点については、ほとんどの教員が内容と文章の両方を評価の対象とすると述べている。多くの教員はレポート課題を出すときに、書き方についての指示や注意を与えている。また、上で挙げたレポート例のaのように評価ポイントを学生に示している科目や、eの課題例のように、学生からのレポートを授業の題材として取り上げ、レポート作成に必要なスキル（この例では資料の利用及び引用の方法）を指導している科目もある。しかし、これらの比較的 student 数の少ない科目を除く一般の講義科目では、レポート作成についての指導や個々の学生へのフィードバックなどはほとんど行われていない。留学生が日本語関係のクラス以外でレポートの書き方を学ぶ機会は、きわめて限られていると言ってよいだろう。

一方で専門科目の教員の多くは、学生のレポートや記述試験の解答に見られる日本人学生の日本語力の低下を問題にしている。今回のインタビューでも、例えば文の主語と述語が繋がらない、独り善がりの文で読み手に内容がきちんと伝わらないなどの問題が挙げられている。しかし、こうした問題について専門科目の中で指導する余裕はない。将来的には、欧米の大学にあるようなライティング・センターの設置や日本人学生も対象にしたアカデミック・ライティングの指導などについて検討する必要があるだろう。

4. 留学生がレポート作成にあたって感じる問題点—学生へのインタビューから

留学生へのインタビューで、専門科目でのレポート作成にあたって直面する問題点として、次のような点が挙げられた。本章ではそれぞれの点について詳しく検討したい。

- ・レポート作成経験の欠如
- ・読解力の問題
- ・専門語彙を含む語彙や表現の不足
- ・専門の内容に関する背景知識の不足
- ・論理を組み立てることの難しさ
- ・レポート提出後のフィードバックの欠如

4-1 レポート作成経験の欠如

今回のインタビューの対象者は、中国と韓国からの留学生である。彼らのほとんどは母国においてもレポートを書いた経験がなく、大学でのレポート作成について、入学直後から大きな不安を感じていたという。ある1年生の中国人留学生は「自分の考えを書くのはレポートじゃないと思った。でも、何を書いたらよいかわからなかった。」と述べている。また、別の1年生の中国人留学生は、「レポートの文章は、自分がこれまで書いてきた作文での文章と全く違うと思っていた。自分はそういう文章を書いた経験がないので、書くのがとても怖かった。」と述べている。彼らはレポートを書くということ、それまで自分が習得してきた日本語では太刀打ちできない別の次元の日本語力が求められるものにとらえていた。今回インタビューを行った対象者の中には、高校時代ま

でに作文を書く機会がかなりあったという学生もいる。しかし、それらの作文は自分の経験や自分の考えをそのまま書いたもので、現在大学で求められているレポートとは異なっていたという。筆者が予想していた以上に、留学生はレポートを作成するという事に心理的なプレッシャーを感じていることが分かった。

このような状態の留学生に対し、論理的な文章の組み立て方やレポートの形式を教えるだけでは不十分であろう。そうした具体的な指導とともに、彼らがこれまで母語あるいは日本語で書いてきた作文や感想文と大学でのレポートとの違いを十分理解させる必要がある。留学生は語彙や表現や体裁などに注目しがちだが、最も作文や感想文とレポートとの最も大きな違いは目的や作成の過程にある。レポートを書くというのは、自分の経験や考えをただ書き記すということではなく、与えられた課題に関して自分なりの問いを立て、教科書や講義ノートを読み返し、さまざまな文献や資料にあたりながら、その問いと格闘しつつ答えを書き上げていく学習の過程の上に成り立つものである。それは母語話者にとってさえ苦勞の多い、時間のかかるものなのである。留学生にはそのことを日本語のクラスの中で一つ一つの課題を通して体験的に理解させる必要がある。また、もし他の留学生も先のインタビューで答えた学生のように、自分がその時点までに学んできたものとは全く違う日本語でレポートを書かなければならないと感じているとしたら、彼らがこれまで習得した日本語とレポートで使われる日本語とは全く別なものではなく、レポート作成においても現在持っている日本語が土台になることを知らせる必要がある。さらに、上記の指導に加え、前章で示したような専門科目におけるレポートのタイプや目的の違いなどをレポートの実例を通して示し、大学でのレポートというものについての具体的なイメージを持たせることも必要であろう。彼らを萎縮させることなく、意欲を持って専門科目でのレポート作成に取り組んでいけるように励ましていきたい。

4-2 読解力の問題

レポート作成には、教科書や参考文献などの読み取りが欠かせない。しかも、限られた時間にかかなりの量の文章を読まなければならない。インタビューでは、教科書などに書かれている内容を理解したり、重要な部分を取り出したりすることが難しいという学生が多かった。レポートを書く前に、講義で配布されたプリント類を読むだけでほとんどの時間を費やしてしまったという留学生もいる。この問題について留学生は次のように述べている。

例えば、何かのことについて、本とか文章があって、（そこから）大事な部分をとるのが、個人的にちょっと弱いかもしれない。重要な部分とかがなかなか見つからない。引用するときにも、大事な部分がちゃんと引用できない。（中国人 2年生）

授業でやったことや教科書の内容がよく理解できない。教科書を読んでも部分的にわからないことがあると、全体で何を言っているのかわからなくなってしまう（中国人 1年生）

他の中国人の留学生からは、漢語で書かれた語彙についてはその漢字から意味を類推して読んでいるが、意味が正確には理解できていないことも多く、レポートを書くときに自分の言葉で表現できないという発言があった。

（経済学部の専門の教科書を読んでも）、意味はわかるけど、レポートには書けない。自分の経験のことじゃないから、それについて書くのは難しい。（中国人 1年生）

このことに関連して、別の2年生の留学生は「意味がわかる」と、「理解する」ととの違

いを次のように表現している。なお、文中の〈 〉内は筆者の質問部分である。

読むのが意味が大体わかります。だけど理解するのが、ちょっと難しいかな。〈その「意味がわかるけど理解が難しい」っていうのは、どういうことだろう。日本語としては意味がわかるということ？〉うん、そうですね。書いている意味わかるんだけど、この授業に対して、その書いている専門のこと、専門用語とか、ちょっと難しかったです。（中国人 2年生）

このように、ある言葉の辞書的な意味は知っていても、あるいは辞書で一般的な意味を調べることはできても、それが専門分野においてどのような概念を示しているのかということが理解できないという問題がある。これには、後述するように、日本の社会や経済に関する背景知識が乏しいことも影響している。

さらに、留学生の中には基礎的な読解能力が十分身に付いていない者もいる。ある1年生の中国人留学生は、教科書や新聞記事などを読むときには、助詞や送りがないなどのひらがなの部分は無視し、意味の推察できる漢語部分だけを拾い読みし、それらの語を自分の頭の中で中国語の語彙に置き換えながら読んでいと説明している。本人はそのような読み方が習慣になってしまっており、なんとなく意味はとれるものの正確に理解しているかどうかいつも自信がないという。この留学生の書く文章はそうした彼女の読み方を反映しており、助詞や助動詞、動詞の活用などの文法機能を表す部分が極めて不正確であった。

4-3 専門語彙を含む語彙や表現の不足

専門用語や文章作成に必要な語彙や表現が不十分なため、自分の伝えたいことが的確に表現できないという悩みは多くの留学生から出ている。人文学部の韓国人留学生は、「現代映像文化論」のレポート作成の際、映画の内容を表す表現が分からないため、図書館で映画評論の本を探し、その中から自分のレポートに使えるような言葉を取り出してレポートに使用したと述べた。また、似ている言葉の使い分けが分からないために、自分が書いたレポートが担当教員に正しく伝わるかという不安を感じながら書いているという声もあった。そうした悩みは日本語力の高い留学生からも出ている。

やっぱり、自分の知っている語彙の中で表現しなければならないんです。ちょっと日本語に書いてあとから読んでちょっと違うなあって思うときあるんですけど、どういうふうな言葉に切り替えればよいかわかんなくて、まあそのまんましたりとか。（韓国人 3年生）

難しいのは、自分は日本語の能力あまり足りないんで、もうちょっと微妙なところわかるようにわからないの（読み手がわかるように書けない）部分はどうしても納得できないし、文章作るときもっと難しくなっているから、あと文法的にとか文章の作り方とか、全然自信がないの。それじゃ困るなと思うの。（中国人 2年生）

日本語の授業ではレポート作成に必要な基本的な表現については指導できるが、その範囲は限られている。上に挙げた韓国人留学生の例のように、留学生自身が教科書や専門の文献、また日本人学生のレポート・論文などから専門用語やレポート作成に必要な表現を意識的に学んでいけるようにすることが必要であろう。筆者の場合は、専門科目の教員から良いレポートの例やゼミの学生の論文集を提供してもらい、それを留学生に回覧するようにしている。これに加えて、レポートで使われる語彙や表現、文型などのリストも留学生と共同で作成したいと考えている。

4-4 専門の内容に関する背景知識の不足

学部留学生は大学に入学した時点では、専門分野に関する知識はもとより、その分野に関する日本での状況についても断片的な知識しか持っていない。今回主な対象とした留学生の場合も、日本の経済に関することからをはじめ、日本の歴史、地理、政治、社会などに関する知識が乏しいために、講義の理解に支障をきたしており、レポート作成においても大きな制約となっているという。ある留学生は、専門の内容に関する背景知識の不足について次のように述べている。

（日本語の授業でのレポートに比べて）専門のレポートは、すごく、専門用語とか、すごく企業に対して経営の方とか、ビジネスに対してどうか。何かすごく…具体的には言えない。＜そういうことについての知識が必要ですね。＞うん、足りない。＜企業のこととか、ビジネスのこととか、知らないと、いくら日本語はできても。＞うん、書けません。日本語のレポートの場合は、自分の生活の中の近い方ですよ。何か周りのこととか、すぐ書けますよね。専門のほうはちょっと違う。（中国人 2年生）

大学での学習を進めていく上での背景知識の不足の問題については、経済学部の講義やゼミの担当者からも指摘されている。日本語や日本事情など日本語教育科目の中でそうした面をどのように補っていくことができるのか工夫しているが、4-3で挙げた専門語彙や表現の習得と同じように、日本語のクラスの中で直接教えられることは限られている。留学生自身が自律的にそうした知識を補っていけるようにするためにどのような援助ができるのか考えていく必要があるだろう。

4-5 論理を組み立てることの難しさ

留学生の多くは、日本語で自分の考えを組み立てていくことに自信が持てずにいる。留学生はインタビューの中で、次のように述べている。

自分が書きたいものは目的は最後まで（最後には）、自分がどういうこと書くかってははっきりわからなくなるんですよ。＜書く前にどういうことを書くかまだぼんやりしているの？＞いや、書こうと思って。でも、最初まで（最初の部分を書いたら）、えーっ、自分がこういうこと書いたんかなあって何か迷っているんですよ。＜ああ、書いている途中で迷っちゃう。それで、何とか？＞いや初めに書くときは何かいや何か最初まで足りない、何か、文章の量が足りないから他のものを入れて、書くんですよ。だから目的がはっきりしないというか。＜分量が足りないから、他の文献からよさそうなところを入れているうちに…。＞うん、初めの2枚くらいは全部自分が書きたいものだから（書けたけれど）、後ろまで全部他に関したものをたくさん入れたんですよ。（中国人 2年生）

やっぱり、レポートと、教科書あるんですけど、でも、教科書のことを写したら、それはいけないから、やっぱり自分の考えとか、例を挙げて書くんだけど、何か長さの問題ですよ。そんなに書けないんで。＜一つか二つの文で終わっちゃう？＞そうですね。＜それが難しかったのね。＞そうですね。＜それで、どうした？ どうやって、長く1枚に。＞そして、あの、図書館からたくさん本借りて来て、なるべく読むっていうか。その中で、何か関係あるものを引用するっていう形もあるし、うーん。＜じゃ、かなり他の本から助けてもらったというか。＞そうですね。やっぱり、最初のときそうでした。（中国人 2年生）

また、ある留学生は込み入った内容になると中国語で書くが、書いているうちに自分が何について書こうとしていたのか主題がわからなくなってしまうと述べている。こうした悩みには、日本語

という母語以外の言語で文章を書くことの難しさと同時に、4-1でも述べたように、レポートの内容を自分で論理的に組み立てていくという経験や能力の不足という問題が含まれている。特に後者の問題は大きい。学生は、書く前に文章全体の構成を考えるが、自分なりに内容を展開していくことができずに表面的で簡単な記述に止まりがちである。また、自分で長い文章を展開できないため、参考文献やインターネットからの引用や無断借用で埋めてしまう例も多い。他の文献から取り出した部分を無理につないだり自分の文章に埋め込んでしまったりするため、文脈が繋がらなくなったり、レポートの主題が不明確になってしまっても、書いた本人がそれに気付いていない場合も多い。3.1 で述べたように、論理を組み立てていく過程や外から得た知識を自分の文章に取り込んでいく方法を学ばせる必要がある。この問題については、次章でもさらに検討したい。

4-6 レポート提出後のフィードバックの欠如

先に3-3でも述べたように、ゼミ以外での専門科目でのレポートの場合、学生たちは教師のフィードバックがほとんど得られないという状況にある。3年生の韓国人留学生はこの点について次のように述べている。なお、このインタビューの部分は機材の不備で録音できなかったため、筆者のメモから再現した。

自分が書いたことが先生に本当に伝わるか心配だった。本当に伝わったかどうか、今でもわからない。1年生のときに書いたものも今考えると恥ずかしい。ある部分で間違っただけを書き直してしまっただけなのに、その間違いに先生が気付いたかどうか分からない。そのことを先生に聞いてみたいと思っていたが、何日も迷っていて、結局、先生に聞きに行くことができなかった。

……後期は授業の内容がよく理解できるようになった。先生が言いたいことが自分にわかってきた。その一方で、後期には良いレポートを書きたいというプレッシャーが強くなった。でも、書いてみてこれでいいのかと不安になった。担当の先生に提出した後でも、あれでよかったのか気になっていたが、先生からの反応は何もなかった。自分が書いた内容が先生に伝わっていることがわかれば自信が持てる。自分のレポートが先生に伝わったかどうか、先生からの反応がほしかった。(韓国人 3年生)

この問題については、専門教員の協力も必要である。3-2のレポート例で、ある専門科目でのEメールを使ったフィードバックの例を紹介したが、それも一つの方策であろう。一人一人へのフィードバックが難しくとも、レポートの評価基準を事前に示すこと、良いレポートの例を紹介することなど、教員がレポートに何を求めているのかということを示すことが望まれる。

なお、ここで挙げた6つの問題点以外にも、表記の問題、文法の問題、特に助詞や接続表現、「である」体に慣れていないなどの問題が出された。特に韓国人の留学生からは促音、長音、濁音などの特殊拍の表記が難しく、ワープロで書いていても、漢字の変換に手間取り余計な時間がかかってしまうということが挙げられている。

5. 今後の課題

本稿では従来の日本語の文章表現の指導内容と現実のレポート作成とのギャップを明らかにしたいという問題意識のもとで、専門科目のレポート課題の現状と、留学生が専門科目でのレポート作成において直面する問題点について、専門教員及び留学生へのインタビューをもとに検討した。最後に、前章で検討したことを踏まえて、留学生のレポート指導において今後特に重要だと考えられ

る点を二つ挙げておきたい。

まず、文献や資料への批判的な読みの能力の養成である。前章で述べたように、レポート作成の場合も、教科書や参考文献など大量の文章の中から、必要な点を探したり、全体の要点を把握したり、書かれている内容を批判的に検討することが必要になる。従来の日本語の読解授業にありがちな、教師の側からの問いに誘導されて文章に書かれている内容を確認していくような受け身的な読み方だけでは、大学での学習における実戦的な読みには対応できない。内容を正確に読み取っていくことはもちろん必要だが、前章で述べたように、自らが読みの主体者となり自分で疑問を投げかけながら答えを求めていくというような読み方、書かれてあることを鵜呑みにせず、他の文献や資料と対比させながら客観的な立場で読んでいく読み方が求められる。留学生が必要とするようなそのような実戦的な読み方を日本語の授業にどう組み込んでいけるかが今後の重要な課題である。

次に、レポート作成における「読むこと」と「書くこと」との結びつきの重視、つまり外から得た知識と自分の知識を統合させ、自分の思考を経た自分なりの文章を作り出していく過程の指導である。前章で述べたように、多くの留学生はその点が極めて不十分である。4-5でも述べたように、引用のルールを無視して、他人の文章を自分のレポートに強引に組み込んでしまうことが留学生のレポートに頻繁に起こっている。要約、引用などのスキルを身につけ、文献や資料などから得た知識や情報を、自分の議論の中に適切に統合させていく方法を学習する必要がある。これは第二言語としての英語教育においても近年強調されていることである。Leki & Carson (1994)は、EAP (English for Academic Purposes)の作文のクラスでは、学生に自分の意見や経験をただ書かせるような課題から脱して、学生に自分の意見や経験を外部の情報や議論と統合することを奨励するような課題へと向かうべきであると述べている (p. 95)。また、Coffin他(2003)も、大学でのライティング教育の課題として、学生が資料を自分の文章に取り入れたり、資料を適切に参照したりしながら書けるように指導すべきだと述べている (p96)。

ただし、この指導の際に気をつけなければいけないのは、要約や引用を単なるスキル練習としてしまっってはならないということである。スキルを教える前に、まず、教科書や文献、インターネットなどに書かれていることと、自分自身との距離のとり方を意識させる必要がある。外からの情報に手当たり次第に無批判に頼ってしまうのではなく、自分自身がどういう問題意識を持っているのか、何のためにその部分の引用が必要なのかなど、書き手としての主体性をしっかりと持ったうえで外部からの知識を利用するようにさせなければならない。インターネットで簡単に大量の情報や資料が入手できるようになった昨今、そうした「読み手」及び「書き手」としての主体性がますます大きく問われてくる。まずテーマをはっきりと絞り、自分自身の主張や問題意識を明確にし、その上で、あくまでも自分の目的に合わせて必要部分に限定して文献や資料を使うように指導していかなければならないだろう。留学生自身が自分の立てた問いにしたがって問題意識をもって教科書や文献を読み、明確な目的のもとに必要な部分を探す。そして、要約や引用などにより自分の文章に取り込み一つの独自のテキストを作る。留学生を対象としたライティングのクラスでこうした「読み」と「書き」を統合した学習が今後重要になっていくであろう。

今回の調査を通して、大学でのレポート指導も含めた留学生への指導の課題が明らかになった。これらは日本人学生にも少なからず共通する問題である。今後、一つ一つの課題について実践を重ねながら検討していきたい。

参考文献

- Coffin, C. and others. (2003). *Teaching academic writing—A toolkit for higher education*. London: Routledge.
- Fairbairn, G. & Winch, C. (1996). *Reading, writing and reasoning—A guide for students*. Buckingham: Open University Press.
- Horowitz, D. M. (1986). What professors actually require? Academic tasks for the ESL classroom. *TESOL Quarterly*, 20 (3) 445-462.
- Howard, R.M. (1995). Plagiarisms, authorships, and the academic death penalty. *College English*, 57 (7) 788-806.
- Jordan, R.R. (1997). *English for academic purposes—A guide and resource book for teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leki, I. & Carson, J. (1994). Students' perceptions of EAP writing instruction and Writing needs across the disciplines. *TESOL Quarterly*, 28 (1) 81-101.
- Leki, I. (1995). Coping strategies of ESL students in writing tasks across the Curriculum. *TESOL Quarterly*, 29 (2) 235-260
- Spack, R. (1988) Initiating ESL students into the academic discourse community: How far should we go? *TESOL Quarterly*, 22 (1) 29-51
- 池田玲子・影山陽子 (2000) 「専門のための日本語作文授業の試み」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第53号
- 小宮千鶴子(1995)「専門日本語教育の専門語—経済の基本的な専門語の特定をめざして」『日本語教育』第86号
- 小宮千鶴子・横田淳子(2002)「専門連語による専門語の自習教材の開発—経済分野を例に」『日本語教育方法研究会誌』9巻2号
- 佐藤不二子・二通信子(1999)「留学生に対するアカデミック・ライティング教育—1年間の指導内容と今後の課題」『経済と経営』第30巻第2号 札幌大学経営学部
- 二通信子(1996)「レポート指導に関するアンケート調査の報告」『北海学園大学学園論集』第86・87合併号
- 二通信子・佐藤不二子(1999)「留学生のためのアカデミック・ライティング教材の開発」『北海学園大学学園論集』第99号
- 深澤のぞみ(1994)「科学技術論文作成を目指した作文指導—専門教員と日本語教師の視点の違いを中心に」『日本語教育』第84号
- 深澤のぞみ(1997)「理工系留学生を対象にした「読む本番」を意識した読解教材について」『日本語教育』第92号